

大橋家庭園（苔涼庭）の説明

大橋家庭園は現当主の曾祖父・大橋仁兵衛が隠居屋敷（別荘）の庭として、遠戚で親しくしていた名造園家・七代目小川治兵衛の監修を得て大正2年(1913年)に完成しました。仁兵衛は瀬戸内海の鮮魚が淀川の水運により京都へ運ばれていた時代から鮮魚の元受を家業としており、『苔涼庭』の名称は親交の深かった各地網元の『大漁』を祈願して名付けたものと伝えられています。

七代目・小川治兵衛は明治・大正時代を代表する造園家で、京都には『平安神宮の神苑』『無隣庵（山県有朋の別荘）庭園』『対龍山荘（市田家別荘）庭園』『清風荘（西園寺公望の別荘）庭園』『有芳園（住友家別荘）』等国指定の名勝を含め、この時代の名園と称されるものが数多く存在します。この時代に京都まで琵琶湖疏水が完成し、その水を滝・川・池など庭の景色として利用する庭造りが七代目・治兵衛を水の名人として有名にした造園の一つのパターンとなっています。

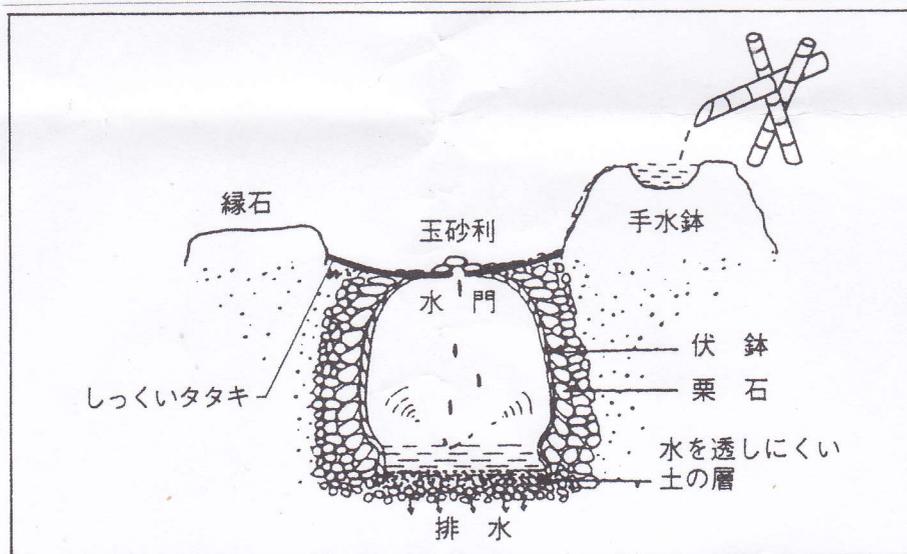
大橋仁兵衛は庭石・石灯籠を大変好み、小川治兵衛の協力を得て次々と入手した12基の石灯籠がすえられています。小川治兵衛は『この広さに12基の灯籠はあまりに多すぎる』と助言しましたが、仁兵衛は『私は灯籠がすきなんや』として、この助言を受けなかったということです。治兵衛が多すぎるとした灯籠も百年の歳月を経て苔で青みがかり落ち着いた風情を見せています。

庭の灯籠は常盤型・雪見・朝鮮・葛家型・春日・三重塔・善導寺・明石その他十二基で庭園の門の外に巴形の飾り燈籠が配置されています。灯籠以外の石造品としては菊花手水鉢・富士型手水鉢・三個の伽藍石があります。

この庭で特筆されるものは百年間いい音を響かせている京都最古の二箇所の水琴窟です。水琴窟は蹲の排水装置として地中に埋めた瓶に工夫を加え、手洗い時に涼しげな音を響かせるもので日本庭園最高の音響装置と称されています。江戸時代に考え出され大正時代までは日本各地で数多く作られた水琴窟は年月を経て瓶に泥がたまり音が出なくなり、昭和になってからは戦争や下水の普及で新しく作られることはなくなり全く忘れられた存在となってしまいました。その結果昭和50年頃には全国で音の聞こえる水琴窟は当家を含め7～8箇所となっていました。ところが、昭和58年(1983年)の朝日新聞『天声人語』の水琴窟の記事や、昭和61年(1986年)のNHK教育テレビによる水琴窟復元の放映などが水琴窟復活の契機となり、現在では京都市内だけでも30数箇所を数えるようになりました。

どうして当庭園に水琴窟を作られたかは文書がなく不明ですが、仁兵衛は雅楽が趣味で音を楽しむ水琴窟に思い至ったのか、あるいは小川治兵衛さんとの相談で琵琶湖疏水を利用した庭作りに代わるものとして水琴窟が作られたのかも知れません。【下に水琴窟断面模式図を示す】

庭園北西に設けられた『待合』は本来『茶室』を作るつもりでしたが家相鑑定の結果、仕様変更して待合にしたものです。



水琴窟断面模式図